

---

# **青春街道薦進中！ 2**

国高ユウチ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

青春街道騒進中！ 2

### 【Zマーク】

N42540

### 【作者名】

国高コウチ

### 【あらすじ】

先日の青春街道・・・の続きです。

「いつたい、何だつたんだううね。小太郎」

自室でマメ柴サイズの小太郎を膝の上に乗せて、ブラッシングをしながら問い合わせる。

晩御飯とお風呂を済ませたあとの一入きりの時間は私にとっては一日で一番好きな時間帯だ。

しゅっしゅっと柔らかい黒の毛を梳りながら、今日の帰りの出来事を思い出すと重いため息を吐いた。

本当に何が何だか判らないお付き合い宣言の元、驚いているギャラリーを傍目に悩んだのは一瞬。

『あーーー?』

『ん?』

叫び声と同時にあらぬ方向を指差し、視線がそれた瞬間を狙つて全力で逃げ出した私は、あの後親友に一緒に帰れないと謝罪のメールを送り、わき目もふらずに家に帰った。

短い距離とはいえ本気で走ったため痛む足を引きずった先で、迎えてくれた小太郎の暖かさに抱きしめた瞬間腰を抜かしそうになつたほど気が張つていたらしい。

顔を舐める小太郎をそのまま抱きしめづけ、我に返つたのはそれから十分後。

我ながら激しく動搖したものだ。

時間を置いてようやく冷静に思い返せるほどになつたが、明日を思うと些か気が重かつた。  
どうしたものか。

淡い黄色の寝巻き代わりのスウェットについた小太郎の毛を取りな

がらため息を吐く。

お気に入りの犬柄の特大クッショーンも私の気分を向上させるのには役に立たない。

静かな夜に気が落ち込みそうになつた瞬間。

「桃！」

部屋に響いた声に、背筋が伸びた。

膝から駆け下りた小太郎が声がした方へ駆けて行く。  
ちぎれんばかりに尻尾を振る小太郎は、声の主が誰かを良く知っていた。

「やまと大和兄ちゃん」

窓からぬつと現れた彼は、顔にかかるカーテンを鬱陶しそうにじけると私を見て太陽のように輝く笑みを向ける。

隣の家に住む生まれたときからの幼馴染は、昔から変わらず窓を交通手段に見たてていいくら注意しても改善される兆候は無い。  
最も、彼が窓を使うことを知つていて、カギを閉めない私を判つているからの行為かもしけれない。

深く物事を考えない変わりに野性的な感が鋭い幼馴染なら、十分納得できる理由だ。

短く切られた黒髪に、大型犬のように感情を映す瞳。

男らしい顔立ちに、バランス良く筋肉のついた身体をしている彼は、運動部から助つ人の要請が多いスポーツマンで、鷹揚な性格から学年問わず人気が高い。

裏表が無く素直な性格は覚えている限り昔からで、大好きなお隣のお兄ちゃんもある。

困ったような表情でこちらを見る姿は珍しく何かに迷つているようで、いつもならあつといつ間に距離を詰めてぎゅうぎゅうに抱きし

めてぐるぐるに腕を伸ばしてくる気配は無い。

入ってきた姿そのままで窓の縁に足を掛ける姿は、落ちてしまわなければいかとこひびがはらはらする。

「大和兄ちゃん？」

「上杉と付き合つてるのは本当か？」

「上杉……」

唐突な大和兄ちゃんの言葉に、得心する。今日も部活の助つ人で学校に残つただろう彼は、部活中か終了後にでも聞いたのだろう。彼の人脈は幅広く、私との関係も日頃の大和兄ちゃんの行動により学校で知らない人間の方が少ないに違いない。

「兄ちゃん、誰から聞いたの？」

「部活の後輩だ。そんなことより、桃。本当か？ よりにもよつて、上杉と？」

「いや、私は付き合つ氣は無いんだけど。すれ違いから生まれた誤解というか何といつか……って、大和兄ちゃん、彼のことを知ってるの？」

「有名だろ？ 一年の上杉は、入学式の日に絡んできた不良グループを伸して、一月で学園制覇。今では裏番として幅を利かせているつて話だ。最も、自分から喧嘩を売ることは無くて売られてきたのを買うタイプみたいだけだな」

「わお。うちの学校番長なんて居たんだ」

「ああ。硬派だぞ、見ていて面白いくらいに」

「知り合い？」

「同じクラスだ。お前も見たことがあるかもな」

口元に指を当てて首をかしげる。

大和兄ちゃんのクラスに遊びに行つたことは何度があるが、番長な

んて覚えが無かつた。

ちなみに、私の中の番長のイメージは長ランにボンタン姿で頭はリーゼントでがちがちにしている強面の大男だ。

想像してみて自分に突っ込む。

こんな人間、今時居ないだろう。

私が勝手な番長イメージをしている間に、よつと声を出した大和兄ちゃんは勢いをつけて部屋に入ってくる。

喜んだ小太郎が前足を兄ちゃんの足に掛けちぎれんばかりに尻尾を振り立てる。

よしよしと兄ちゃんも兄ちゃんでぐりぐりと頭を撫でて、じゃれ付く小太郎を抱き上げた。

足を垂らした小太郎は、近くにある大和兄ちゃんの顔を舐める。

「大きくなつたな、お前」

「うん。でも、まだ小さいままだけどね。これ以上大きくならないみたい」

「可愛くていいじゃないか。健康だしな」

「そうだね」

小太郎を飼う切欠を大和兄ちゃんは知っている。だからこそ、感慨も深いのかもしない。

優しいまなざしは彼が庇護すべきものだと決めたものには平等に注がれるのは昔から変わらない。

そんな大和兄ちゃんが私には自慢だ。

勉強は出来ないけれど、優しくてスポーツが出来る強い人。

しばらく笑顔で小太郎を撫で繰り回していた兄ちゃんは、はつと思い出したように顔をこちらに向けてきた。

小太郎を下ろすと私の真正面に座り込む。

手を伸ばすと私の髪を撫で梳いた。柔らかい空気。傍に居ると無条件で安心できる。

困ったように眉を下げ、戸惑いつぶやきで続きを促す。

「じゃなくって。上杉の話だ。桃、勘違いつてどう言つことだ？」

「それが、良くわからないんだ。今日の帰りにしーちゃんを校門で待つてたんだけど、小太郎の話をしてたら俺と付き合おうって。何が何だかさっぱり」

「小太郎の話？」

「うん。母さんからメールが来て、見てたんだよね。その写真がすつじく可愛くて！あ、見る？見たい？」

「いや、今はいい。それで？」

「あ、うん、えと、つい興奮して小太郎についての愛を叫んでたら、何時の間にかあの上杉君？とやらが傍に来て相槌を打っていたかと思つとあれよあれよと話が流れで」

「そういうことか」

ふむ、と眉間の皺を深めた大和兄ちゃんは、顎に手を当てて嫌そうに呟く。もしかしなくとも、彼は原因がわかつたのだろうか。

苦虫を噛み潰したような表情で私を見た後、深深くため息を吐いた。

心なしか肩を落とし、首を振る。

何とも言えず不安を煽る姿に、嫌な予感が背筋を掛けぬけた。

「ああ～・・・桃？」

「ん？」

「お前、上杉の名前知ってるか？」

「知るわけ無いじゃん。今日初めて彼を知つたっていうのに。でも、展開から薄々読めてきてるよ」

違つてくれればいいな、なんて祈りはきっと神様に通用しない。

何故なら普段から敬虔な信者ではないし、困ったとき以外に頼りにした覚えも無いからだ。

そんな都合がいい似非信者など、神様も救う余裕は無いに違いない。そうに決まってる。

困ったように眉を下げる大和兄ちゃんの表情が言葉より雄弁に全てを物語つているのだ。

違つて欲しいと願うものの、儂い願いが通る確率は針の先ほどどう。

心臓を落ち着けるために息を吐く。

認め難い物ほど真実に近いのは、いつの時代も定石なのだ。

「上杉君はコタロウ君つていうのかな？」

「ああ。上杉コタロウ。コが虎つて漢字だが、読みは同じだな」

「虎太郎・・・」

「で、お前は小太郎への愛を叫んでたんだっけか？」

「うん」

「また・・・タイミングが悪い」

「全くねえ」

しみじみと同意してしまつ。

むしろ、それ以外に居間何が出来ると叫うのか。  
全身の力が抜けて座り込んだ。

「まあ、何かあつたら俺が守つてやるから」

「何かあつてからじゃ遅いんじゃないの」

ぼそり、と呟くと視線を逸らされた。

明日からが非常に気が重い。

どうすれば・・・と落ち込んでいると、大きな手のひらが頭に降りてきた。

そのまま、小太郎にするときのように撫でる。耳元を指先で撫られ首を竦めると声を殺して笑われた。

「とりあえずは、上杉の誤解を解くところからだな。俺も手伝つてやるから」

「うん。・・・大丈夫かな」

「成せば為る、だ」

「そうだね」

お日様のような笑顔に、つられるようにうなずいた。  
まあ人生なるようにしかなるまい。

お天道様もびっくりのミラクルに、神様を怨まないでもないけれど、  
まあ仕方がないねと。

目の前で胡坐を掻いている兄ちゃんと、声を大にして笑い飛ばした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4254o/>

青春街道騒進中！2

2010年10月21日04時31分発行